



三浦義彰先生を悼む

日本生化学会名誉会員 千葉大学名誉教授 三浦義彰先生は2010年11月19日に逝去されました。享年95歳でした。

三浦先生は1915年東京帝国大学医学部内科学教授三浦謹之助の次男として東京でお生まれになりました。フランス医学・フランス語に精通されていた父君の影響で暁星小学時代からフランス語を学ばれておられた関係で、高校は大阪高等学校に進まれ、その後、東京帝国大学医学部医学科に入学後、1941年に同科を卒業されました。卒業後直ちに佐々木隆興先生率いる佐々木研究所で生化学研究を志されたのでありますが、世の中は基礎研究に専念できる状況ではなく、嘱託として海軍への入隊を余儀なくされました。海軍では、海南島における実戦や赤痢菌との闘いも体験されましたが、1944年には航空医学研究所に戻られ、兄玉桂三教授や吉川春寿助教授の指導のもとで、「戦争に直接役立つ研究」として航空医学、栄養学等に従事されております。

1945年の敗戦後は東京大学生化学教室での研究を再開されましたが、終戦直後のことでもあり、研究費も生活費も充分ではなく逗子で週3回の内科医としての勤務もされていたとのことです。1948年には、東大の兄玉桂三教授のもとで大学院特別研究生となりました。早くから核酸研究の重要性と放射線同位元素を用いた研究の有用性に気付かれていた三浦先生の研究室には医学部から松平寛通、杉村隆、上代淑人等、薬学部からは野口照久と、後に日本の核酸研究の中核的な存在となる若い研究者の卵の議論で熱気に包まれていたと聞いております。1952年、ロックフェラー財団の戦後第1回の給費生としてペンシルバニア大学医学部生化学教室に留学、当時未だ日本では使われていなかった ^{14}C を駆使してプリン代謝系酵素経路の解析に先駆的な成果を挙げていたJ.M. Buchanan教授のところで核酸研究を開始されました。

三浦先生の研究に対する国際的な視野の広さや卓越した社交性は、この留学の前後から、欧米のそれもトップクラスの研究者や研究室を積極的に訪れられて多くの知己を得、そのひとつひとつの繋がりを終生大切にされたことにより培われ、その後の国際的な研究の発展にいかんなく発揮されることとなりました。1953年に東京大学助教授になられ、翌年同大医学部衛生看護学科教育担当として日本での核酸研究を再開されました。日本でしか行えない研究材料としてのカイコを、そしてより単純な系として、そのアミノ酸のうち37%がグリシンであるというカイコの絹タンパク質フィブロインに着目され、高等蚕糸校長の伊藤広雄先生や東北大学志村憲助教授らと共同研究を開始されたのであります。

1960年、千葉大学医学部の医化学教室に教授として赴任されましたが、当初は超遠心機、放射能カウンターの購入などの研究室の整備に奔走され、幸いロックフェラー財団やNIHからの多額の研究費を持っておられたものの、時恰も学生運動の最中であり、研究費を外国に頼ることの是非を問われ大変困難な時を迎えられました。千葉大学での研究は核酸

代謝とタンパク質合成に焦点を絞り、東大時代からのカイコの研究をさらに発展させ、絹糸腺から抽出した粗 mRNA 画分を用いてネズミの肝臓の細胞液の中でのフィブリンを生成させるという当時として画期的な成果を挙げられました。さらに吉田肉腫細胞を用いた抗がん剤感受性の研究、筋肉細胞の分化研究や生体内の細胞周期が比較的と同調している再生肝を用いた核酸の代謝研究を積極的に推進されました。当時は臨床系からの大学院生も多く常時 10 数名の大学院生が在籍しており、研究室は活気に溢れておりました。医学部での教育面では、医学生が亀の甲（化学式）アレルギーになることを大層に嫌っておられ、できるだけ亀の甲を使わず、医学生がより身近に親しめる生化学の教育の実施に努められておりました。三浦先生のこのような姿勢は、遡って、緒方富雄先生が主唱され、現在も続く総合医学週刊誌「医学の歩み」の編集委員を創刊の 1964 年から 1981 年まで勤められたことと無縁ではありません。当時の日本には十分な科学情報がなく、特別の許可を得て米軍病院の図書室で得た情報を日本の研究者に伝えるという使命感、専門的な医学知識をできるだけ分かり易くそして解説し、そして幅広く伝達することで日本の医学の歩みに貢献することにご苦労をされたからです。

1967 年には第 7 回の国際生化学会（会長；赤堀四郎，組織委員会委員長；島園順雄）が開催されました。この会は、Oparin 博士、Ochoa 博士、Theorell 博士らのノーベル賞受賞者をはじめ 50 ヶ国からの参加者はおよそ 4,500 名に及んだ、それまでに日本で開催された国際会議としては最大規模のものでしたが、三浦先生は学会幹事として（総務幹事；江上不二夫）、会を成功裏に終える縁の下の大きな力となられたのでした。その当時の日本には国際的な社交性を身につけた研究者は多くはなく三浦先生の面目躍如でありました。

1970 年半ばから米国 Indianapolis の G. Weber 教授が主宰する Advances in Enzyme Regulation という小さな研究会に度々出かけられています。この会は酵素学、生化学、腫瘍学でユニークな成果を挙げている世界中の研究者が少人数でほぼ缶詰状態で議論をするという会で、日本からは徳島大学(当時)の勝沼信彦先生が中核的な役割を果たされているものです。この会で、三浦先生は細胞学の重要性を再認識され、実験材料としてはラットの再生肝を用い、細胞周期の G1 から S 期に起るいわゆる “Pleiotipic Response” の分子機構の解明に集中されました。

1976 年に千葉大学附属図書館長、同評議員を併任された後、1981 年に千葉大学を定年退官されました。定年後はサントリーの医学生物学研究所の顧問として勤められ、また、70 歳の半ばまで共立女子大学非常勤講師として、栄養学や生化学の教育に携わっておられましたが、分かり易い教科書を数多く出版され、間接的に生化学教育の普及に努められたのでした。三浦先生の思い出を記す中でどうしても欠かすことができないものがあります。それはテニスです。海軍時代から始められたテニスの歴史は長く、国際会議への出張の際には常にラケットを携帯されていた話は夙に有名でしたが、千葉大学医学部テニス部の部長を 10 年余の長きに亘って続けられ、奥様共々同テニス部の指導をされてきましたし、ご退官後も 85 歳になられるまで神宮クラブのプレーを楽しまれておりました。

最後になりましたが、千葉大学退職の直前、1979 年に、長年にわたる日仏両国間の学術交流への貢献が大きく評価され、フランス政府よりシュバリエ・ド・オールド・ナショナル・ド・メリット章を授与されておられますが、三浦先生はこの受章を大変に喜ばれ、また誇りに思われていたのであります。

三浦先生から頂いた数多くの教えに感謝し、ここに改めて心から哀悼の意を表します。

千葉県がんセンター名誉センター長 崎山 樹